

ガイト・ガスダーノフ『クレールとの夕べ』の文体

諫 早 勇 一

I

マルク・スローニムの暖かい理解によって、雑誌「ロシアの意志」という舞台を与えられたガイト・ガスダーノフは、この雑誌を足場に前途有望な新進作家としての地位を確固たるものにするが、彼の名声が揺るぎないものになるのは、1930年最初の長編小説『クレールとの夕べ』（以下『夕べ』と省略する）の成功によってであることは言をまたない¹⁾。この作品以降ガスダーノフは若手作家の中でナボコフ（当時のペンネームによればシーリン）と並び称される声望を勝ち得²⁾、翌1931年には「現代雑記」の門戸も開かれて、その才能はますます飛躍を遂げていく³⁾。その意味で『夕べ』は作家ガスダーノフの形成を探る上で必ず論じなくてはならない作品と言えるだろう。本稿は「ロシアの意志」に掲載された短編小説を扱った前々稿⁴⁾、「現代雑記」に掲載された短編小説を扱った前稿⁵⁾をうけて、このガスダーノフ最初の長編小説を主にその文体の側面から探ることを課題としたい。

II

『クレールとの夕べ』*Вечер у Клэр*⁶⁾のあらすじを述べることは容易でない。しばしば指摘されるように、ガスダーノフの作品の多くは明瞭なプロットを欠いており⁷⁾、あらすじのないことこそこの作品の一番の特徴だとも言えるのだから。従って、ここではそのアウトラインを述べるだけにとどめるが、作品はニコライ・ソセドフという明らかにガスダーノフ自身をモデルにした⁸⁾語り手の一人称の告白から成り立つ。パリに亡命した彼はクレールという今は夫ある身のフランス人女性と10年ぶりに再会し、途漸を重ねた挙げ句遂に長年の思いを遂げる。そして、彼女の傍らで眠られぬままに無聊の夜を過ごす彼の脳裏に次々とロシア時代の思い出が去来する。その思い出は、時間の流れに厳密に沿ってはいないが、幼年時代や父の死、学校時代そしてクレールとの最初の出会い、更には志願して白軍の装甲列車で戦ったことなどがとめどもなく流れていく。そして、白軍が敗れて、旅立っていく船の中でクレールがフランス人だったことを思い出し、必ずや亡命先で再会できようとの期待で物語は結ばれている。即ち、かつて論じた初期の短編『黒い白鳥』などのように冒頭と結末部分で時間を逆転させるという技法が用いられている。また、作品自体は二つの部分に分けられており、前半はロシアにおけるクレールとの最後の出会いまでが、様々な回想と共に語られているが、後半は専ら内戦がテーマとなっていて、前半とのつながりはいささか希薄とも言える。

このように『夕べ』はプロットの面白さより、主観的で抒情的な語り手の告白の文体によって評判を得たともいえる作品だから、その作品研究においてガスダーノフの文体が重視されてきたのも当然と言えるだろう。『夕べ』の英訳 *An Evening with Claire* の訳者 J. Daynard は例えば不完了体過去の特異な用法を指摘している⁹⁾が、以下実際の例を引いてみると、

— Ты о чем? — спрашивала мать.

— Какая бессмысленная вещь! — говорил он. (37)¹⁰⁾ (下線は引用者、以下同じ)

(「あなた、何を考えていらっしゃるの」と母は尋ねた。「なんて馬鹿げた話だ」と彼は言った。)(訳は引用者、以下同じ)

といった文の下線部はそれぞれ *спросила, сказал* と完了体過去で表現されるのが普通だろう。特にこの本来は *сказать* という完了体が用いられるべきところで、*говорить* という不完了体が使われている例は『夕べ』に数多く見られ、この作品の大きな特徴をなしていると言えよう。

また、*Russian Literature in Exile: the Life and Work of Gajto Gazdanov* と題されたガズダーノフについてのモノグラフを著した L. Dienes も、almost (почти) といった副詞の頻出を特徴に挙げている¹¹⁾ ように、『夕べ』の文体は細かく見るといろいろと興味深い要素に満ちており、これらを検証することはこの作品を理解する上で欠くことのできない基礎的な作業と言えるだろう。

こうした観点から、本稿では特に英語で *as if* と翻訳される¹²⁾ のようなロシア語の表現 (точно, как будто, словно, как бы 等) に焦点を当てて以下論じてみたい。

III

『夕べ』には *точно* という単語が45ほど見られる (181ページ中)。まずこれを博友社ロシア語辞典に従って品詞分けしてみよう。この辞書によれば、この単語は I) 副詞、「正しく、まさに」等、II) 助詞、「そのとおり」等、III) 挿入語、「ほんとうに」等、IV) 接続詞、「まるで」等、V) 助詞、「のような気がする」等、の五つの品詞 (ただし、助詞は二つの意味に分かれる) に分けられる¹³⁾。そして、一般的には I) の用法が一番多く用いられていると予想されるが、この作品においては、それはわずかに2例しかない。2例とも掲げる。

Я теперь совершенно точно припоминаю. (50)

(僕は今全くはっきりと思い出せるよ)

и все эти названия и иностранные слова и запутанные события новой истории, точно так же, как законы теплоты и отрывки из французских и немецких классиков, — все это было настолько чуждо Перенке, что он не мог этого ни понять, ни запомнить,... (109)

(そして、これらすべての名称や外国語、近代史のこみいった出来事は、熱法則やフランス、ドイツの古典作家の断片とちようど同じように、ペレンコには全く無縁だったので、彼はそれを理解することも、覚えることもできなかった)

次にかなり特殊な用法である II) だが、意外にもこれは3例見られる。と言っても、3例とも軍隊用語の *так точно* (Yes Sir) だからここでは引用しない (52, 53)。そして、III) にあたる例は見られないから、残りは IV) と V) とに当てはまると考えてよい。だが、この IV) と V) は品詞としては区別されるべきものだが、実際の意味の上では強いて区別する必要は感じられない。例えば次の例を見よう。

Дома я точно переселялся в какую-то иную страну, где нужно было жить не так, как всюду. (77)

(家でまるで私はいつもとは違って暮らさなくてはならないどこかよその国へ移り住んだか

のようだった)

文法的に言ってこの точно を接続詞とすることは難しい。しかし、意味の上ではこれは以下に触れる接続詞の точно と変わらないと考えてよいだろう。実際英訳でも At home I felt as if I had moved to some foreign country where one had to live differently from everywhere else とあって¹⁴⁾ そのことを裏付けてくれる。従って、ここではⅣ)とⅤ)を特に区別せずに同様の意味を持つものとして論じていきたい。するとこの意味が45例中40例を占めることとなり、その際立った多さが明らかになるだろう。

その多さはある意味でガスダーノフの書きぐせとも感じられる。例えば、

я испытывал такое чувство, точно проработал много часов подряд. (68)

(私はまるで何時間もぶっ続けて働いたかのような気持ちを味わった)

という文などは前に такое がある以上 как のような単語が自然ではないだろうか。

また、次の例

Эта же сила, думал я, точно громадный магнит, останавливает меня в моих душевных блужданиях... (88)

(私は考えた。この力が巨大な磁石のように私を精神的な迷いに置き去りにして、)

も точно を用いる必然性は感じられず、как (英訳では like¹⁵⁾) の方が一般的と言える。つまり、точно という単語の使用にはガスダーノフの嗜好も無視できない。とはいえここに意図的なものも当然うかがえるし、その意図的な部分こそ「夕べ」という作品を考える上で重要だと思われる。

Ⅳ

「まるで……のよう」を意味する точно の用法はもちろん一般的なものだし、それが他の人やもの様子のたとえ、理由、意図などの推量として用いられる場合、これはガスダーノフ独特なものとは決していえない。いくつか例を引こう。

он сажился, точно это была земля, а не вода, ... (32)

(彼はまるでこれが水ではなく地面でもあるかのように腰をおろした)

Она вздыхала, точно очнувшись. (49)

(彼女は我にかえったように溜め息をついた)

Орел тотчас же дернулся вверх, точно пуля его подбросила в воздухе, ... (92)

(鷲はまるで空中で銃弾に投げ上げられたかのようにすぐ上へと身震いした)

しかし、このような頻繁な точно の使用にはやはりガスダーノフの文体の大きな特徴を見ないわけにはいかない。そして、その第一の特徴は比喩による思考ではないだろうか。ガスダーノフは以下に述べるように比喩をことのほか好んだ作家だが、その比喩の中で точно は

重要な位置を占めている。точно を用いた比喩の例をいくつか引こう。

Я... стал дерзок, утратил ту медлительность движений и ответов, которая после смерти отца безраздельно воцарилась у нас в доме, точно заколдованном холодным волшебством матери. (59)

(私はずうずうしくなって、父の死後まるで母の冷たい魔法にかけられたように我が家を完全に支配していた行動と返答の鈍さを失った)

Когда она стихала, из под снега вдруг появлялся целый мир, точно сказочный лес, выросший из чьего-то космического желания;... (91)

(吹雪がやむと、まるで誰かの宇宙的な願望から生えたおとぎ話の森のような全世界が突然雪の下から現れた)

а эхо доносилось до нас новое и непривычное, точно раздавшееся из тех стран, в которых мы еще не были, но которые теперь нам суждено узнать. (185)

(そして、まるで我々がまだ行ったことはないが、今や知ることを運命づけられた国々から聞こえてきたかのような新しい、なじみのないこだまが響いてきた)

これらの比喩は単なる文飾として片づけることはできない。例えば三番目の例は船でいよいよロシアを離れ、知らないどこかの国に亡命を運命づけられた語り手の予感をこだまが暗示しているが、この точно は語り手の漠然とした不安の予感を表現するのに効果的ではないだろうか。そして、こうした точно の用法の一つの特徴はその漠然としたとらえどころのなさを強調するのに、上の二番目の例に見られるように (чьего-то)、しばしば不定代名詞を伴っていることだろう。他にも例を引こう。

точно это усилие чьего то духа вдруг остановилось и умерло ... (19)

(まるで誰かの精神のこの努力が突然止まって、死んでしまったかのようにだった)

потом он задумается, точно вспоминая что-то. (73)

(それから彼はまるで何かを思い出したかのように考え込む)

эти молодые люди ездили верхом на наемных лошадях и отчаянно трясли локтями, точно кто-то подгалкивал их под руку. (75)

(これらの若者たちは借りた馬に乗って、まるで誰かが下から手を押したかのように、恐れおののいて肘を揺すった)

言ってみれば、точно とは言い表し難いものに少しでも肉薄するために作者がもらす言葉であり、その言いがたいものを言い表わそうとする時、作者は что-то (何か)、кто-то (誰か)、чей-то (誰かの) と口籠もらずにはおれない。そして、ガズダーノフにとって一番言い表し難いものとは疑いもなく自分自身、自分自身のとらえどころのない感情、心的状態だろう。実際『夕べ』の語り手はしばしば夢と覚醒とを区別する感覚を失い、自分自身を明瞭に認識することができない。次の例を見よう。

я точно не видел и не знал всего, что со мной случилось после того момента, который

я воскресал: ... (27)

(私は自分で蘇らせた瞬間以降自分に起きたすべてのことをまるで見もせず、知りもしないかのようにだった)

—Да, —говорю я себе, точно проснувшись и прозрев, —да, это Клэр. (89)

(そうだ。あたかも眠りから覚めて、視力を回復したかのように、私は言う。そうだ。これはクレールだ)

もちろん、自分自身がとらえ難いのは現実感覚が鈍くなっているためだけではない。それは明瞭な理性をもって肉薄しようとしてもやはり手の中からすりぬけてしまうほどとらえ難いものである。точноはそうしたとらえ難い自分自身に対してもらす作者のささやきにも聞こえる。以下の比喩はその良い例に思える。

Когда моя болезнь прошла, я продолжал все-таки жить точно в глубоком черном колодце, над которым, непрерывно возникая и изменяясь и отражаясь в темном водяном зеркале, стояло бледное лицо Клэр. (90)

(病気が直っても依然として私はまるで深く黒い井戸の中に暮らしているようだった。その井戸の上には、暗い水の鏡の中にひっきりなしに現れ、変化し、影をうつしながら、クレールの青白い顔があった)

горела лампа над моим столом, за окном было холодно и темно; и я жил, точно на далеком острове; и сейчас же за окном и за стеной теснились призраки, входившие в комнату, как только я думал о них. (107)

(私の机の上にはランプが燃え、窓の外は冷たく暗かった。そして私はまるで遠い島に住んでいるかのようにだった。今しも窓の外、壁の外では私が考え始めるやいなや部屋になだれこんでくる亡霊たちがひしめいていた)

既に述べたようにこうした比喩は単なる文飾ではありえない。これらはいわばガズダーノフの現実認識の反映であり、更に言えば彼の世界感覚 мироощущениеの反映でもあろう。従って、その意味を探ることは『夕べ』という作品の理解にとって決して瑣末なことではあるまい。だが、それについて考察する前に、更に論を深めるため一旦 точно を離れ、同様な意味を持つ他の単語や句も検討しなければならない。

V

точно 以外の「あたかも……のよう」という同様な意味を表す単語、句でこの作品に用いられているものを列挙すれば、как будто (12例)、как бы (10例)¹⁶⁾、будто (5例)、словно (5例)、как если бы (4例)、как будто бы (1例)等があげられよう(計37例、точноを加えると77例)。もちろん、これらの言葉のニュアンスの違いを検討することも重要に違いないが、ここではそれよりもまず共通する点に着目して以下に論を展開していきたい。

まず、これらの言葉は当然ながら他の人やもの様子のたとえ、理由、意図などの推量として用いられている。いくつか例を引こう。

Темнело; и как будто синее стекло застывало в воздухе, ... (87)

(暗くなった。そして、あたかも青いガラスが大気中で凍り付いたようだった)

— Ditez moi— сказала Клэр, как бы умоляя меня ответить ей правду ... (15)

(「聞かせて」、クレールはあたかも真実を答えてくれと私に懇願するように言った)

и опять я слышу слабый голос няни, доходящий до меня будто с другого берега синей невидимой реки: ... (88)

(そして私は再び、青い、目に見えない川の向こう岸から私に聞こえてくるような乳母のかすかな声を聞く)

Шумели листья от ветра, внизу стрекотал неизвестно откуда взявшийся кузнечик, и вдруг умолкал, словно ему зажимали рот ладонью. (139)

(風で木の葉がざわめき、下の方ではどこからかやって来たきりぎりすが鳴いていたが、突然手で口をおさえられたようにやんだ)

я увидел стоящую у моей кровати Екатерину Генриховну, совершенно так одетую, как если бы это происходило среди бела дня, причесанную и спокойную. (64)

(私はベッドの脇に、まるでこれが真昼間に起こったかのような服装をして、髪を整え、落ち着いたエカテリーナ・ゲンリホヴナが立っているのを見た)

— Вы это говорите так гордо, как будто бы вы сказали: Лев Толстой. (81)

(「あなたは、まるでレフ・トルストイです、って言うように自慢気に言うのね)」

そして、これらの言葉がしばしば不定代名詞を伴うことも точноの場合と同様だ。煩雑になりすぎないように少し例を示すだけにとどめよう。

Меня вообще как-будто не было, и книгу Сервантеса читал кто-то другой. (28)

(あたかも私は全然いなくて、セルバンテスの本を誰か別の人が読んでいるようだった)

отец мой при этом сочувственно на меня смотрел, кивал головой и как бы оказывал мне какую-то безмолвную поддержку. (47)

(父はこの時同情するように私を見て、頭をうなずかせ、まるで私に何か無言の支持を与えてくれているようだった)

И опять я видел бледное лицо отдельно от тела, и колени Клэр, словно отрубленные чьей-то рукой и показанные мне. (89-90)

(私は再び、体と別になった青白い顔と、誰かの手で切られて私に見せられたようなクレールの膝とを見た)

比喩もこれまで引いてきた例からわかるように、数多い。ここでは、顕著なものを2つだけ見てみよう。

Я не понимал тогда своего состояния; теперь же мне казалось, что все эти странности и изменения походили на то, как если бы по широкой и гладкой полосе воды вдруг пробежал бы луч прожектора и вода рябилась бы и блестела, ... (87)

(当時私は自分の状態が分からなかった。今ではこうした奇妙なことや変化は皆、あたか

も水の広い滑らかな帯をサーチライトの光が走って、水がさざなみをたてて輝くのに似ているように思われた)

Знаю только, после этого вновь наступило молчание, — и потом опять зазвенел лед. Будто маленький лесной карлик, живущий где нибудь в дупле, тихо играл на стеклянной скрипке. (93)

(知っているのはただこの後また沈黙がやって来たことだけだ。それから再び氷が鳴り出した。あたかもどこか木の空洞に住む小さな森の小人がガラスのヴァイオリンを静かにひいているように)

最初の引用は更に続いて、比喩がもっとふくらんでいるが、煩瑣になるので省略した。ただ、ここで казалось, походили といった言葉が用いられているのは後に触れるが、注目に値する。точно, как будто のような「あたかも……のよう」を意味する言葉が用いられる時、「……のように思える」、「……に似ている」といった類似の表現によって、その曖昧さが増幅されている例はここだけではない。ある意味で、「夕べ」におけるガスダーノフの文体は、こうしたいわく言いがたいものの表現に満ちているのだから。

точно の際に触れた、亡命の不安な予感にあたる例もある。

Я часто думал тогда о кораблях, как бы спеша заранее прожить эту жизнь, которая суждена мне позже, ... (168)

(私は当時あたかも後に運命付けられるこの生活を予め急いで暮らすかのように、船のことをしばしば思った)

また、夢と覚醒が定かでない状態も同じく表現されている。

гул и звон стояли в ушах и на улице мне вдруг становилось так трудно идти, так трудно идти, как будто я с моим тяжелым телом пытаюсь продвигаться в том плотном воздухе, в тех мрачных пейзажах моей фантазии, где так легко скользит удивленная тень моей головы. (24)

(耳なりがした。そして突然この濃密な空気の中、私の頭の驚いた影が軽やかに通りぬけていく私の幻想の暗い光景の中で、あたかも自分の重い体を前進させようとするかのように、通りを歩くのが困難になった)

上の引用は自分自身のおかれた状態、内的(というより内面と外面が境を失った)状態のとらえどころのなさを表現しているとも見られる。つまり、точно に関して述べた自分自身のとらえ難さは別の表現についても同様にあてはまる。論を補強するためにもう少し例を引こう。

я как будто стоял на берегу реки, готовый броситься в воду, но все не решался, зная, однако, что этого не миновать: ... (78)

(私はちょうど川岸に立っているようだった。水に飛び込もうとしていて、それは避けら

れないと知りながらも、しかし、決心がまだつかなかった)

Что то заставляло меня стремиться все дальше, —как будто я не знал, что не увижу ничего нового. (94)

(あたかも何も新しいことは見つけれないことがわからなかったかのように, 何かが私をもっと先へと邁進させた)

以上引用してきた多くの例から容易に見て取れるように、точноに関して述べてきたことは、多少ニュアンスの違いはあるとしても、как будто, как бы といった同様の表現についてもあてはまる。従って、以下の論ではこれらを特に区別せずにまとめて検討していきたい。ただ、その前に比喩表現に関して少し補足しておこう。

VI

比喩の文体はいろいろあるが、一番一般的なものは так や как によって言い表されるものだろうか。『夕べ』でも次の例などはオーソドックスなものと呼べるかも知れない。

白軍の装甲列車での同僚ラヴィノフのもとに不思議な女性エリザヴェータ・ミハイロヴナが深夜しばしば訪問して来るが、半覚醒状態の語り手には хорошо 「良い」と нехорошо 「良くない」という言葉しか覚えがない。そして、こう語られる。

Так бывает, что когда тонет кто-нибудь, то над ним на поверхности появляются пузыри; и тот, кто не видел ушедшего в воду, заметит только пузыри и не придаст им никакого значения; и между тем под водой захлебывается и умирает человек, и пузырями выходит вся его долгая жизнь со множеством чувств, впечатлений, жалости и любви. То же происходило и с Елизаветой Михайловной: хорошо и нехорошо — были только пузырями на поверхности разговора. (173-4)

(誰かが溺れる時、その人の上の水面に泡がでることがある。水に沈んでいく人を見なかった人は泡しか見えず、それが少しも重要だとは思わない。ところが、水面下では人がもたえ、死にかかっている、その人の様々な感情、印象、哀れみや愛を伴った長い全人生が泡となって出ているのだ。同じことがエリザヴェータ・ミハイロヴナに起こっていた。「良い」と「良くない」とは会話の表面の泡に過ぎなかった)

ところが、こうした表現の他にも『夕べ』には比喩を特徴付けるいくつかの独特な言い回しが見られる。それを точно, как будто 以外にも拾ってみよう。

まず注目しなくてはならないのは、既に触れた казаться (it seems to me) といった婉曲的な表現だろう。『夕べ』の語り手はしばしば断定を嫌い、こうした曖昧な言い回しをする。その数は正確には数えていないが、точно に迫るくらい多いとも見られる。そして、この表現も比喩を表すことがある。一例を引こう。

夕方語り手は椅子にもたれ、階下から聞こえてくるピアノの音に耳を傾けている。そんな気分がこうたとえられる。

Мне казалось, что я плыву по морю, и белая, как снег, пена волн колыхнется перед

монми глазами. (77)

(私は海を漂っており、雪のように白い波の泡が目の前で揺れているように思われた)

次に特徴的なのはこれも似た言葉 (походить на) について既に触れたが、похожий を用いた表現だ。これまた一例だけにとどめる。

語り手は自分の二つの世界 (外面的世界と内面的世界) について語った後、内面的世界に関してこう述べる。

Было похоже, что оно боится собственного уничтожения, которое случится в тот момент, когда внешне я окончательно окрепну. (67)

(その世界は私が外面的に決定的に強くなった時に起こるだろう自身の消滅を恐れているかのようにだった)

最後に注目したい言い回しは напоминать (remind of) を用いたものだ。本稿の趣旨からははずれるのでここでは詳しく触れないが、『夕べ』の主題は記憶と深く結びついている¹⁷⁾。その記憶と関わりのある言葉 (напоминать は本来「思い出させる」という意味) が比喩の表現とも関係していることは、注目してよい事実だろう。ここでも一例だけ引く。

Белова, который как-то туда пришел, поразила нарисованная птичья голова, держащая в клюве какой-то темный кусок, отделенно напоминавший обломок железа. (104)

(どうしてだかそこへ行ったベローフは、かすかに鉄のかげらを思わせる何か黒い小片を嘴にくわえた鳥の頭の絵に驚いた)

ここでも как-то, какой-то と不定代名詞、不定副詞が繰り返されて、曖昧さは増幅されている。

比喩の表現についてはまだまだ論じることが可能だが、議論をあまり錯綜させないため、この議論は一旦打ち切って、まとめにはいる。

VII

これまで述べてきたように、『夕べ』には точно, как будто のように「あたかも……のよう」を意味する表現、更にそれらの語句やそれ以外の語句を用いた比喩表現、また「……のように思われる」といった曖昧な表現が多く見られる。しかし、こうした表現は全編を通じて均等に存在しているわけではない。ある箇所にはこうした表現が連なって見られるかと思えば、何ページにもわたって全く見られないこともある。そして、その偏在の理由を考える時、一番すぐ思い当たるのは、小説の中心が外面的な事実の描写 (内戦や父親の思い出の描写のように) に置かれている時、こうした表現は少なく、反対に小説の中心が語り手の内面に移ると著しく増加するという傾向だろう。ついでに言えば、小説が会話体を中心に成り立っている時、当然ながらこうした表現はほとんど見られなくなる (会話の文の中にここでいう意味の точно が現れるのは一例しかない)。

では、全体としてはむしろ描写がヴィヴィッドで、翻訳しやすい明快な文体の持ち主とも目

される¹⁸⁾ ガズダーノフの文章が急にその明晰さを失い、突然作者が口籠もり始める内面描写の時とはどんな時だろうか。いくつかの例を引きながら考察していこう。

以下に挙げる例はクレアと初めて一夜を過ごした語り手が寝つかれないままに、部屋の壁紙に見入る場面だ。

Темно-синий цвет, каким я видел его перед закрытыми глазами, представлялся мне всегда выражением какой то постигнутой тайны — и постижение было мрачным и внезапным и точно застыло, не успев высказать все до конца; точно это усилие чьего то духа вдруг остановилось и умерло — и вместо него возник темно-синий фон. Теперь он превратился в светлый; как будто усилие еще не кончилось и темно-синий цвет, посветлев, нашел в себе неожиданный, матово-грустный оттенок, странно соответствовавший моему чувству и несомненно имевший отношение к Клэр. (19)

(私が閉じた目の前に見た暗青色は、いつも私には何か解きあかされた秘密の表現のように思えた。そして、その解明は暗く、突然のもので、まるですべてを終わまで言い終わらないうちに凍ってしまったようだった。まるで誰かの精神のこの努力が突然止まって、死んでしまったかのようだった。そして、その代わりに暗青色の背景が現れた。今やそれは明るい色に変わった。まるで努力がまだ終わらずに、暗青色は明るくなりながらも、その中に奇妙なほど私の気持ちに適合し、疑いもなくクレールと関係のある突然の、くすんで陰鬱なニュアンスを発見したかのようだった)

内容がわかりにくいのは必ずしも僕の訳文の稚拙さのためだけではあるまい。語り手は壁紙の色の中に何か現在の自分の気持ちにつながるものを発見したように感じるが、それはあくまで一瞬の感じであって、後になって言葉にできるようなものではないし、その一瞬の感じさえ錯覚であったかも知れない。そうしたとらえどころのない、つかまえどころのない不思議な感覚を言葉にしようとするとき、語り手は口籠もり、точно, как будтоを連発する他ない。これは通常の言葉では言い表せないものを表現しようとする努力とでも言ったらよいだろうか。それとも言い表すことの不可能を知りつつ、あくまでも自分の感覚に頼ろうとして洩らす言葉だろうか。いずれにせよ、周囲の光景と自分の内面との照応を見出そうとする時、語り手は口籠もらざるをえない。

もう一つ例を引こう。ここには、точно が一箇所しか出てこない。しかし、既に触れた казаться, напоминать といった単語が繰り返されることによって、比喩が積み重ねられていく。以下は装甲列車から見たあたりの風景について語られた部分だ。

Мне казалось, что они мчатся, вздрагивая на стыках, и точно безмолвно рассказывают о далеком путешествии сквозь снег и черные поселения России, сквозь зиму и войну, в необыкновенные страны, напоминающие гигантские аквариумы, наполненные водой, которой можно дышать, как воздухом, и музыкой, которая колеблет зеленоватую поверхность; ... (161)

(私にはこう思えた。それらは継ぎ目でふるえながら疾走し、雪をぬけ、ロシアの黒い入植地をぬけ、冬と戦争をぬけて、不思議な国へと向かう遠い旅について、まるで無言のままに物語っているようだった。その国は、空気のように呼吸できる水と、緑色がかった表

面を揺らす音楽に満ちた巨大な水族館を思わせた)

目の前を通り過ぎていく風景は、語り手の内面のフィルターを通過することによって、明確な輪郭を失い、夢の中の光景のようにとらえどころのないものになる。語り手があるいは過去に縛られながら、あるいは未来への漠然とした不安に心を乱されながら現在の眼前の出来事を物語る時も、その語り口は曖昧に、譬えに満ちたものにならざるをえない。

ガスダーノフの文章の軽快なテンポが、一転してゆるやかになり、明晰さを失って、言い淀め始める例は枚挙にいとまがないから、例は以上に止めよう。そして、この2例だけでも単なる外面描写ではなしに、語り手の内面のフィルターを通して外界が語られるというその特徴の一端は窺い知れるのではないだろうか。その代わり最後に、では一体こうした「夕べ」の文体的特質はガスダーノフのどのような現実認識、世界感覚に由来しているかを考察してみたい。

VIII

「夕べ」の語り手を特徴付ける性質はいろいろ挙げられようが、これまでの文脈から一番大切な特質は物事の意味をすぐに感知できないことではないだろうか。例えば次の文を見てみよう。

Прежде, чем я понимал смысл какого нибудь события, проходило иногда много времени, и только утерев совсем воздействие на мою восприимчивость, оно приобретало то значение, какое должно было иметь тогда, когда происходило. (67)

(私が何かの出来事の意味を理解するまでに時として多くの時間が経過した。そして、私の感受性に対する影響力を全く失ってから、それは本来起きたその時に持つべきだった意味を獲得するのだった)

同様の記述は他にも見られる。いくつか引いてみよう。

но восприятие мое никогда не бывало непосредственно сознательным, и полный смысл того, что мне объяснялось, я понимал лишь через некоторое время. (59)

(しかし、私の知覚力は決して直接に意識的ではなかった。そして、私に明らかにされたことの完全な意味はいくらか時間を経てようやく理解された)

Это отсутствие непосредственного, немедленного отклика на все, что со мной случалось, эта невозможность сразу знать, что делать, послужили впоследствии причинами моего глубокого несчастья, ... (67-8)

(私に起こったすべてのことに対するこの直接的で速やかな反応の欠如、何をなすべきか直ちにはわからないことは後に私の大いなる不幸の原因になった)

я по прежнему не владел способностью немедленного реагирования на то, что происходило вокруг меня. (140)

(私は今まで通り、私のまわりに起きた出来事に対する即座の反応能力を持っていなかった)

自分のまわりに起きた出来事の意味をすぐには理解できず、時を経てようやく理解できるようになるというこの繰り返しの記述はやはり語り手にとって重要なものに違いない。ではこのような性向を持った語り手は周囲の出来事にどう対処するのだろうか。以下の短い記述は実に示唆的に思える。

Я тогда не понимал этого, но не переставал это ощущать;... (84)

(当時私はこれを理解できなかったが、これを感じることはやめなかった)

参考のために英訳を引けば、I didn't understand all of this but could not stop feeling it¹⁹⁾とあって、understand (理解する) と feel (感じる) が対置されていることがわかる。つまり、この語り手がまずめざすことは理解することにより、感じることだと言える。そして、前章で触れたように、語り手はいわく言いがたいものを理性よりも感覚を通してしばしば表現しようとしていた。更に引用すれば、この作品の一つのクライマックスとも目される²⁰⁾ ヴィタリイ叔父さんが内戦への参加を決意した語り手に向かって言う次の言葉も示唆に富む。

Но вот, что я тебе советую: никогда не становись убежденным человеком, не делай выводов, не рассуждай и старайся быть как можно более простым.... Ты не поймешь, тебе будет только казаться, что ты понимаешь; ... (130)

(お前にひとつ忠告しておこう。決して確信した人間になるな。結論を出すな。理屈ばかりやらずに出来るだけ単純であろうと努めなさい。……お前は理解することはできない。理解していると思えるだけだ)

ここにも казаться が現れているのは興味深い。人は何かを理解したとよく思う。しかしそれは結局錯覚に過ぎず、また新たな理解の努力へと向かわなくてはならない、そうヴィタリイは言っているように見える。そして、もし理解が不可能ならば、そのための前提作業、すなわち感じることから始めなければならない、という主張はヴィタリイの教えや語り手の信念というよりもっと作品世界全体を解く鍵ではないだろうか。

つまり、もし人が目の前の現象を直ちに理解できるなら、叙述は必然的に断定的になり、казаться と婉曲的な表現を用いる必要はないだろう。しかし、人は所詮理解できたと錯覚するだけだとしたら、またこの語り手のように自己の即座の理解能力を否定しているとしたら、叙述は必然的に曖昧にならざるをえない。人は断言することはできず、できることはただ感じることだけ、限りなく理解に近づこうと努力するだけになる。その理解不能²¹⁾ なものの理解に少しでも接近しようとして洩らす言葉こそが точно にはじまる一連の言葉ではなかろうか。ここで論じてきたさまざまな表現はガスダーノフの現実認識、世界感覚に深く根ざしていると考えざるをえない。

繰り返せば、ガスダーノフは比喻を語るときでも как (…のように) と言い切るのではなく、как будто, как бы (あたかも……のように) と言葉を添えて、表現をやわらげるのが常だった。それは単なるかきぐせといって済ませられるものでは決してなく、言い切れないことを知りつつも、感覚を通して言い切れないものに少しでも肉薄しようという語り手の姿

勢の反映だったと考えたい。「夕べ」という作品に頻出する一連の表現は、ガスダーノフという作家の現実認識、世界感覚を知る上での恰好の手掛かりであり、それはまた「夕べ」という作品を知る上での重要な鍵だとも言えるだろう。

註

- 1) cf. Daynard, J. Introduction. In Gazdanov, G. *An Evening with Claire*, tr. by Daynard, J., Ann Arbor, 1988, p. 7.
- 2) cf. Dienes, L. *Russian Literature in Exile: the Life and Work of Gajto Gazdanov*, München, 1982, p. 45.
- 3) 拙稿「ガイト・ガスダーノフと「ロシアの意志」—「黒い白鳥」を中心に—」, 「人文科学論集」23号, 1989, p. 160参照。
- 4) 同上。
- 5) 拙稿「ガイト・ガスダーノフと「現代雑記」—ナボコフとの比較の視点から—」, 「人文科学論集」24号, 1990。
- 6) 前稿までは「クレールとの夕べ」と表記していたが, Claire のフランス語読みに近いクレールという表記を以後用いる。
- 7) cf. Pachmuss, T. (ed. & tr.) *A Russian Cultural Revival: a Critical Anthology of Emigré Literature before 1939*, Knoxville, 1981, p. 313.
- 8) cf. Daynard, *op. cit.*, p.8.
- 9) cf. *Ibid.*, p.17.
- 10) 引用は以下 Газданов, Г. *Вечер у Клэр*, Ann Arbor, 1979 (Reprint of the 1930 ed.) により, かっこ内にページ数を記す。
- 11) cf. Dienes, *op. cit.*, p. 158.
- 12) Daynard の英訳には as if が77例, as though が6例 (計83例) 登場するが, それらは точно (36例), как будто (11例), как бы (8例), словно (5例), будто (4例) などのロシア語に対応している。
- 13) 木村彰一他編「博友社ロシア語辞典」, 1975, p. 1279.
- 14) Daynard, *op. cit.*, p. 62.
- 15) *Ibid.*, p. 70.
- 16) как бы ни (いかに……にせよ) のような表現は数えない。
- 17) см. Струве, Г. *Русская литература в изгнании*, Paris, 1984 (Reprint of the 1956 ed.) стр. 292. Слоним, М. *Литературный дневник: два Маяковских — роман Газданова*, Воля России 5/6, 1930, стр. 454.
- 18) cf. Daynard, *op. cit.*, p. 17.
- 19) *Ibid.*, p. 67.
- 20) cf. Dienes, *op. cit.*, p. 185.
- 21) cf. *Ibid.*, pp. 182-186.

なお, 引用にあたって, ロシア語の原文は新正字法に改めた。